教員間の連携を強化するFDで、学部横断で行う社会人基礎力育成プロジェクトを支える

社会人基礎力を人間力の1つのスキルと捉える

大学全入時代に向けて、人間力育成を軸としたカリキュラム改革を行った際に、「社会人基礎力」を取り入れたのが日本文理大学です。日本文理大学は、「人間力」を精神的な部分である「こころの力」と、スキルである「社会人基礎力」および「専門能力」「職業能力」という4つの総合力として捉えています。そして建学の精神である「産学一致」に「人間力の育成」と「社会・地域貢献」を教育理念に掲げ、これらの3つの柱が強く絡み合った形での実践型教育を通して「専門知識や技術に加えて、一人の大人として自立できる能力と自信を身に付ける教育」を目指しています。

「『社会人基礎力』は、『何事にも諦めず興味を持ってチャレンジする力』であると理解しています。最近は一般的に、自分に自信がない、内に秘めるものがあってもなかなかうまく表現できない、行動する前に諦める、知っている人以外とは関わりを持ちたくない、という学生が少なくありません。しかし、彼らも学年が進むにつれて、就職を現実的な問題として意識してくるようになります。その過程において、『社会人基礎力』は産業界と大学との共通認識された用語、スキルとして学生達に必要なものとして気付かせることができるものだと考えています」（人間力育成センター長　吉村充功准教授）

「社会参画実習」のプログラム

1年	学内改善提案プログラム	・学内施設（食堂、図書館等）の改善提案 ・学生交流イベント計画
2年	企業課題挑戦型プログラム	・商業施設（大分パルコ）の集客イベントのプロデュース ・インターネットを使ったホテルの集客アップの提案 など、商品開発や集客提案
3年	地域課題挑戦型プログラム	鶴崎・清正公二十三夜祭歩行者天国のイベント企画

資料提供　日本文理大学

学年に応じてステップアップするPBLは、再チャレンジの機会も準備する

日本文理大学は、工学部と経営経済学部という性格の全く異なる2つの学部を持つ大学です。「社会人基礎力」育成の中心となるプログラムが、1年次から3年次で行われる教養基礎科目「社会参画実習」です。この授業は、2つの学部の混成チームで行われるPBLで、それぞれの学年の目的に応じたテーマに取り組みます。1年次・2年次は、経営経済学部は必修、工学部は履修指導によりほぼ全員の学生が履修、3年次は選択科目となっています。

1年次の授業は、合同1クラスが30名以内になるように編成され、それぞれの学部から1名ずつの教員による、ダブルティーチングの形で進められます。6人以内のチームを作り、課題に取り組むことを通してコミュニケーション力や情報収集、役割分担などの基礎的なスキルを身に付けることが主眼に置かれます。テーマは「環境にやさしいキャンパス作り」「学生キャンパスコミュニケーション計画」など、学内の施設の改善案や運営計画

など身近なものです。この活動を通して、学生は異なる学部を含めたネットワークを作り、学内に自分の居場所を作るとともに、大学で学ぶ意義を肌で感じ、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の必要性を実感する機会となります。

2年次では、地元の企業から与えられた、課題に取り組みます。「課題解決に専門知識を活用する」という観点から見ると、専門知識が十分ではない2年次の段階で、企業課題に取り組ませるのは早いとも考えられますが、「2年次のうちに自分に足りない能力を自覚させ、それを学習意欲に結び付け、学び直す機会を3年次で与える」というのが日本文理大学の基本スタンスです。また、企業の人と接する経験は、3年次で行うインターンシップの導入にもなる、という効果があります。さらにこの授業には、学生と年齢の近い若手職員が、ファシリテーターとして授業に参加します。ディスカッションで意見を引き出すだけでなく、仲間や企業の人との関係に悩んだり、理解が不足したりなどで問題を抱える学生の相談に乗り、またその様子を教員に伝えることで、きめ細かいフォローが行われています。

3年次では、「お祭りの活性化」など地域の課題に取り組みます。企業の課題は「売れる新商品を作ってほしい」「集客数がアップするイベントの企画をしてほしい」などミッションが明確ですが、お祭りの盛り上げのような地域の課題は、価値観や要求が多様なことが多く、当事者同士の調整が難しいので、より高度な取り組みとなります。また、学年が上がって、それぞれの学部での専門分野の学びが深まるにつれて、「もの作り」と「マーケティング」「商品開発」の両方の考え方や立場の違いに触れ、課題意識を持つことが発想の幅を広げる機会にもなります。また、社会に出たときに、少しでも世代の違いや立場の違いを理解し、人間関係を良好に保つためのトレーニングでもあります。

「社会参画プロジェクトでは、特に『チームで働く力』を重視しています。社会に出れば、立場の違うさまざまな人と一緒に仕事をしていかなければならないので、ふだん接する仲間以外ときちんとコミュニケーションを取れる力を、段階を踏んで育成することを目指します。1・2年次で座学だけを続けて、いざ3年次で実践してみたところで、『できると思ったけど、できなかった。でもすぐに就職、卒業だ』となると、結局何も身に付かないまま、できないことだけがわかっただけということにもなってしまう。それよりは2年次で実践させて、3年次では自信を深めるところや反省すべきところを、ちゃんと振り返られる余裕を与えたい。2年次で返り討ちにあって、『3年次でもう一度勉強します』と言うようになるのが理想です」（吉村先生）

「社会参画実習2」のスケジュール

	テーマ	内容	ねらい
第1講	集合授業	○ガイダンス ○課題選択 ○企業課題提示	企業課題挑戦型プログラムの目的を理解する
第2講			
第3講	ワークショップ(1)	○グループ分け　○テーマ再説明＆方針理解 ○内容整理（KJ法など）＆役割分担 ○ビジネスマナー	メンバーのことを知る
第4講	企業訪問(1)	○企業紹介　○情報収集　○意見交換	企業のことを知り尽くす
第5講	ワークショップ(2)	○課題整理　○情報収集　○課題分析	提案のコンセプトを明確にする
第6講	企業訪問(2)	○意見交換　○情報収集 ○市民アンケートなどは随時実施	全員で全力で提案する
第7講	ワークショップ(3)	○情報整理　○アイデア整理	提案の繰り返し/ ホンモノを作る準備をする
第8講	ワークショップ(4)	○中間発表	他のチームに刺激を受け肉付けをする
第9講	ワークショップ(5)	○報告書、口頭発表資料作成着手	ホンモノを具体化する
第10講	企業訪問(3)	○意見交換　○最終確認	顧客を口説く
第11講	ワークショップ(6)	○口頭発表準備　○報告書作成	死力を尽くして準備する
第12講	集合授業	○合同口頭発表会	全力でぶつかる
第13講			
第14講	ワークショップ(7)	○反省会　○最終報告書	自信をつける・問題点を整理する
第15講	集合授業	○振り返り	客観評価

資料提供　日本文理大学

教員間連携を強化するＦＤの仕組み
―授業参観＆研究会とチームティーチング

「社会人基礎力」の育成を幅広い科目で実施していくために、日本文理大学では教員の授業改善のためのさまざまな取り組みが行われています。

まず、科目間で教員同士が連携し、問題意識を共有することが重要です。そのために、授業の工夫を積極的に共有する取り組みとして、教員同士の授業参観が準必須とされ、全員が1科目以上の授業を参観することになっています。さらに、この仕組みを使って、「社会人基礎力」教育のコアとなる科目を選定して授業見学を行い、その後、授業担当者と参観者が意見を交換する研究会（ワークショップ）を数回行います。さらに、ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）研修会でこれらの結果や感想を共有する研修も行っています。また、学生と教員のシンポジウム形式で、自由に意見交換できる授業も設定しています。授業参観は、学内ＬＡＮで簡単に登録することができ、教員同士の負担を軽減しています。このような取り組みを通して、教員自身の中に授業改善への意識が醸成されています。

もう一つが、1年次の「社会参画実習」などで行われているチーム（ダブル）ティーチングです。若手とベテランの教員がペア（場合によっては3人以上）で授業を行うものですが、「社会参画実習」での試みが広がって、既に全体の80％近い教員が経験しています。互いの授業の方法を学び合うだけでなく、学生の反応の違いを知ることもできます。また、

社会人基礎力も「観点」（指標）に取り入れた「成績評価基準」の標準フォーマット（「社会参画実習1」の例）

○成績評価基準							
評価方法／指標と評価割合	試験	小テスト	レポート	成果発表	作品	その他	合計
総合評価割合			50	15		35	100
①こころの力			10				10
②前に踏み出す力			10	5		10	25
③考え抜く力			10	5			15
④チームで働く力			15	5		15	35
⑤専門能力							
⑥職業能力			5				5
⑦学習に取組む姿勢・意欲						10	10
※②~④は「社会人基礎力」に該当							

図版提供　日本文理大学

学部を横断して実施することで、学問的な刺激を受けるとともに、それぞれの学部の学生の個性の差も体感でき、学内全体の連携体制を作ることに効果を上げています。

さらに、各部署の職員が連携して、学生の相談に乗りながら他の科目の学習の状況を確認したり、「社会参画実習」で学生が見つけた興味を他の学習につなげて、他の科目の受講を勧めたりするなど、きめ細かいフォローを行っています。現在、学生の出席や単位取得の状況の情報を一元化し、学内ＬＡＮで全ての職員と教員が学生の状態を共有できるようになっており、問題のある学生を指導した記録を教員がシステムに書き込み、職員もチェックして関係者同士で指導方法を相談することも行います。

また、平成22年度から全科目の成績評価指標に「社会人基礎力」の能力要素を組み込み、シラバスにも記載されています。これは、大学の教育理念である「人間力」に評価基準を導入し、教員の意識付けとともに教育の質保証につなぐことが目的です。「社会人基礎力」は、定義付けや尺度が明示されており、また振り返りに使うシートが各種整備されているので、成長の評価が難しい「人間力」の指標になりうる、と考えられました。大学では、まず評価割合・評価方法を示し、その中できちんと評価を行うことを重ねることで全体のカリキュラムのバランスを明らかにし、科目配置の適切性や内容の妥当性の議論につなぎたいとしています。

このように、教員・職員が学生の指導の方法に対する問題意識を共有し、同時に学生の実態をきめ細かく把握しようとする姿勢があるからこそ、さまざまな活動で「社会人基礎力」を複層的に育成することができ、シラバスへの導入も可能になったと言えるでしょう。